

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第12号

● 目次 ●

論点：存在意義の再確認	1
萬華鏡：ダグール族	2
Area Report [SIGNAL] : 「ロシア」「モンゴル」「中国」	3.4
日本館だより	4
東北アジア研究センター開設5周年記念行事について	5
東北アジア研究センター日本館とロシア科学アカデミー・シベリア支部の鉱物学・岩石学・地質研究所との合同研究会	6
最近の共同研究会から	6.7
センター動向	7
会員の広場：東北アジア研究センター5周年記念懇親会写真	8



論点 存在意義の再確認

東北アジア学術交流懇話会 理事長（東北アジア研究センター長） 山田 勝芳



平成13年・2001年は、新たな「衝突」の始まりとして歴史に記録され、人々に記憶され続けることになりそうです。9月11日以降の事態は、グローバル化が席卷しているか見えながら、実は世界は極めて不安定な基盤の上に立ち、薄い表皮の下には民族主義・ナショナリズム・宗教的感情・歴史的感情などのマグマが沸々としてたぎっていることを、改めて人々に認識させました。

今日、日米・日中・日韓といった二国間関係のみならず、相互依存関係と競争関係は極めて複雑になり全世界的に網の目のように張り巡らされています。食料問題・エネルギー問題だけをとりても明らかですが、日本是世界との共生なくして存立できません。また日本の東アジアと北アジアの接点という地理的な位置も、変えることはできません。

このような日本の状況を再認識する機会を与えられたのが、12月1日のセンター公開講演会での和田春樹先生（東京大学名誉教授・本センター客員教授）のご講演でした。なぜ「東北アジア」という地域設定であるべきなのか、そこでの21世紀の課題は何か、について明快な回答と指針が示されました。また先生が早くから提唱してこられた「東北アジア共同の家」構想が、分かりやすい形で提示されました。世界第一の領土のロシア、世界第一の人口の中国、世界第一の経済力と軍事力のアメリカ、世界第二の経済力の日本がせめぎあい、それぞれに領土

問題がからみ、しかも朝鮮半島と台湾海峡の分断というホットスポットがある地域は、他にはありません。したがって東北アジアの安定は、世界の安定の要となります。

本センターの研究対象とするエリアは、なによりも日本そのものが含まれる地域です。ここでの相互理解と共生関係の増進なくして、日本の安定はありません。この重要でかつ歴史的に複雑な関係がある地域を研究対象としていることの意義は、いくら強調してもしすぎることはありません。問題は、学術研究によってこの地域の安定にどのような形で寄与できるかにあります。

本センターは、平成13年10月1日に開設5周年の記念行事を開催致しました。その際、西澤潤一会長・大道寺小三郎副会長・渡邊幸治副会長以下、会員の皆様多数のご参加をいただきました。厚く御礼申し上げます。

開設6年目から7年目となる平成14年は、本センターが真価を問われる年になります。新たなステージへの研究体制の整備と国立大学法人化に向けての作業が必要です。学術的成果を示すとともに、社会的貢献を進め、この地域の共生関係の増進に寄与することが求められています。そして、これらへの真摯な努力こそが存在意義を再確認させるものと信じております。

会員各位におかれましては、新年に当たってのこの決意に対して、なにとぞ暖かいご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

萬華鏡 ダグール族

客員教授 エンフバト(恩和巴圖)

ダグール族は中国の北方民族であり、その言語はアルタイ系モンゴル語族に属する。彼らは、主に内モンゴル自治区、黒竜江省、新疆ウイグル自治区の塔城などの地域に分布している。

ダグール人は、自分のことを Da or あるいは Da hor と呼ぶ。明朝時代は「達奇鄂爾 (dakhior)」と呼ばれ、清朝時代には「達呼爾 (dahor)」と呼ばれていた。清朝は、彼らを「伊徹満州」(つまり新満州)に入れ、清代最後の皇帝はダグール族のゴボル(郭博羅)部の女性を皇后とした。清朝滅亡後、ダグール人はモンゴル族とされた。中華人民共和国成立後、1954年にダグールは、一つの民族と承認され、中国語の正式な族名は「達呼爾」となった。1958年に、内モンゴル自治区のフルンボイル盟にモリンダワ・ダグール族自治旗ができた。その後半世紀の間にダグール族はいろいろな面で大きな発展を遂げ、人口は1954年の解放当時の5万人から現在12万人に達した。

ダグール族は長い歴史をもち、紀元1世紀に大興安嶺から移動した「拓跋鮮卑」の残部である。隋、唐の時代には「室韋」と呼ばれていた。ダグール人の民族名からすると、唐代の「大室韋」の後裔である。元の時代から明代、清初に至る間、ダグール人はシベリア南部と黒竜江の中・上流域に暮らしていた。17世紀中頃、ロシア人の東進により、ダグール人は黒竜江南沿岸の嫩江流域に移住した。18世紀に、ダグール人の一部は続々と新疆の伊犁、フルンボイル、愛琿、呼蘭などの地域に守備兵として送られ、そこに永住した。

ダグール族の社会構造は、明末・清初の頃には、氏族連盟の段階にあった。清の初期頃も、本来の氏族や部族による構造が保たれていた。これらの氏族や部族の中で、「哈拉 (Hala)」「莫昆 (Mokon)」は現在も残っている。しかし、それらは血縁関係を示すだけで、社会的な働きはすでになくなっている。

ダグール族の経済は、古代の「室韋人」の経済を受け継いでいる。清末から民国初期までは、基本的に「無羊少馬」の生活を送っていた。また、粟や糜などを植え、狩をするという自然経済だった。現在、彼らは新しい経済生活に適応し、農牧業を営む技術を習得して、ダグール人が自ら相当な規模をもつ現代的な農場を営んでいる。

ダグール族は独自の民族文化を有し、豊富な童話、神話、民話、歌、踊りがある。面白いことに、ダグール族の文化には、日本文化と関係するところがある。hanikaという玩具は日本の「雛(hina)」とほぼ同じである。mukulienという口琴は日本のアイヌ人の楽器mukkuriとほとんど同じである。

ダグール族は、文化教育を重視する。清代には満州文字を使い、満州語によって民族の文化水準を高めることができた。また、満州文字を使ってダグール語の作品を創作していた。この文化遺産を研究した『清代達呼爾文文献研究』という本が近年出版された。民国以降は漢文とモンゴル文を学習し、今は主に漢文を用い、一部の地域ではモンゴル文とカザフ文が使われている。民国の初期から、知識人を中心に教育に力を注ぎ、若い人々を内地の大学やモン

ゴル国、ソ連、日本に留学させ民族の知識人を養成した。解放後はさらに多くの指導層や知識人が輩出した。ダグール族は「知識人が多い」「文化が高い」民族と言われている。

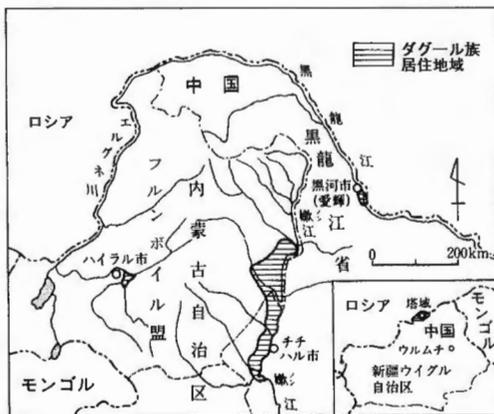
ダグール人は誠実善良で規律を重んじると同時に、勤勉な民族でもある。人口数万人の中から清代には数十人の将軍や「都統」が出現した。民国初期に発足した内蒙古人民革命党の創始者で著名な教育家である郭

道甫氏もいる。解放戦争当時、ダグール族の民族武装組織が中国人民解放軍に編入されて解放戦争に参加し、内蒙古自治区および中華人民共和国の成立に大きく貢献した。

ダグール人はスポーツが好きで、騎馬、弓、相撲が得意である。中国の中で、唯一古代のホッケーを保持している民族でもある。ダグール族の青年によって構成されたホッケー・チームが何回も中国チームとして国際試合に参加し、国のために名誉を勝ち取った。これにより、モリンダワ・ダグール族自治旗は、国から「ホッケーの故郷」という称号を受けた。

今ダグールの人々は、民族の輝かしい伝統を継承し発展させると同時に、先進的な科学文化を学んで、21世紀に世界の先進民族の隊列に入るよう努力している。

(訳：オ・フレルバートル)



AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから 米国テロとロシア経済

1999年にブーチン大統領が就任してから、ロシア経済は好調に転じた。1999年のGDP成長率は5.4%であり、2000年には8.3%であった。すでに2001年度の上半期でロシアのGDP成長率は5%を記録しており、欧米や日本の経済が減速する中で、ロシアの経済成長率は世界的に見ても顕著である。英国経済紙『フィナンシャル・タイムズ』（2001年10月30日）は社説で「ロシア経済の復活」を論じた。すでにロシアの外貨準備高は340億ドルとなり、タイ（319億ドル）やマレーシア（254億ドル）を抜いている。この経済成長に最も貢献しているのがロシアの石油関連輸出である。

ロシアは資源大国であり、サウジアラビアに次ぐ世界第二位の石油生産国である。1999年以後自国の特性を活かし資源輸出額を高めている。現在、石油関連と天然ガスの輸出を合計すれば、ロシアの輸出額全体の半分以上を占めることになる。石油関連輸出だけでも四分の一を占める。この石油の75%以上、また天然ガスの90%以上がシベリアで生産されている。つまり、シベリアの資源がロシアの経済成長を牽引しているといっても過言ではない。

ところが、最近ロシア経済の成長に支障となる事態が生じた。それは昨年9月11日に起こった米国テロである。このテロ行為に

より、世界経済が一時的にせよ停滞局面に入り、石油に対する需要が減少した。このため国際石油価格が急速に下降してしまった。ロシアにとって重要な外貨取得源が危機的な

状況にさらされている。これに対処するためロシアとOPECは石油の減産を通じて供給を減らし、それにより国際石油価格を安定させようとしている。しかし、今年前半は国際石油価格の低迷により、ロシアの経済成長が減速することは確実と思われる。ロシア経済が本格的に復活するのは、資源依存の経済成長パターンからシフトする時であろう。

(塩谷昌史)



クリスマスの街角

モンゴルから 内モンゴルの旱魃災害

最近、モンゴルの砂漠化、環境破壊が注目を集めている。内モンゴル地域では、ここ100年間中国内地から流入した大量の移民による開墾や伐採が、草原そのものに大きなダメージを与えている。こうした自然破壊や生態学的均衡の喪失が旱魃や雪害をひき起こす主な原因となっているのである。

2001年夏、内モンゴルはシリングル草原を中心に、ここ100年ない旱魃に見舞われた。北京の『農報』によれば、内モンゴル自治区草原の90%が旱魃に遭い、3200万頭の家畜が被災し、内60万頭が餓死した。家畜だけではない。ソニト左旗とソニト右旗では野生のシカも多数餓死している。

今年3月中旬から5月中旬までの雨量は平年の5分の1のわずか10mmで、平均気温は平年を2〜3度上回るという異常気象が続いた。4月に入っても雨がなく、1ヶ月以上強風と黄砂に見舞われた。ひどい場合は、夏が過ぎても緑の草ばかりか、枯れた草さえ残っていない地方もある。その一方で、いくつかの地域では蝗虫の災害が起き、飢えた家畜が、やむを得ずこれらの蝗虫を食べてしま

うケースもみられた。餓死したある家畜の腹から一匹の鼠と10数匹の蝗虫が見つかったそうだ。餓えが限界に達した家畜が互いの毛を食べることはよくあるが、動物や虫を食べるのは珍しい。旱魃に見舞われた遊牧民たちの中には、家畜を売る人が後を絶たない。ある遊牧民が家畜を全部売って最後は自殺した、という悲しいニュースも耳にした。

このような旱魃は決して偶然に起きたものでなく、地球全体あるいは中国全土における開墾、伐採などによる人為的な自然破壊とそれに並行する地球温暖化に起因するものと見られる。2年連続、内モンゴルの黄砂が北京で観測されたことで、中国政府はやっと内モンゴルの厳しい現実を目を向けはじめた。中国農業科学院畜牧院の研究員李敏氏は生態破壊がその主因であると指摘している。中国では今後も辺境地帯の開発が続くと思われるが、その成果と結果の真否が問われる時期が来ている。

(オ・フレルバートル)

中国から 中国の国民体育大会

本センターの所在地である宮城県を会場とした今世紀最初の国体は大成功を収めた。2000年大会以降国体も二巡目に入ったが、地元出身地の選手やチームの活躍を見るのは、やはり心躍るものである。さて、隣国中国にも日本の国体に相当する国民的体育行事があるのをご存知であろうか。「中華人民共和国全国運動会」と呼ばれるこの体育大会は、今年は11月11日から約二週間の日程で、広州市を中心に広東省各地を会場として盛大に開かれた。第1回大会は大躍進運動のさなかの1959年に、北京市を会場として開かれた。開催の目的は第一に体育活動を通して国民の団結を図ることだったが、同時に東西冷戦期にあつてオリンピックへの参加資格を持たなかった中国が、スポーツ分野での優秀さをアピールすることも重要であった。実際この大会では当時の世界記録や五

輪優勝記録を上回る成績を収めたことが国内メディアで大々的に報道された。面白いことに、当時の競技種目の中には中国将棋や囲碁なども含まれていた。また人民解放軍選手団が圧倒的成績を収めていたというのも当時の状況を反映している。その後文化大革命などで断続的であったが、第三回以降は一度だけの例外を除き、ほぼ四年の間隔で開催されるようになり、内容的にもオリンピック競技種目に準じる形に整備され、「国内オリンピック」の

中国国体のマスコット
・ウエイウェイ

観を呈している。今回の広州大会は第九回目にあたる。全国の各省・自治区・直轄市のほか、解放軍や鉄道、建設、金融部門等からも選手団が派遣され、さらに今回は中国に返還された香港・アモイ代表団も参加した。四年に一度の全国的イベントと言うこともあり、中国でも連日選手たちの活躍が報道され、開催地広東省が総金メダル数約410枚のうち、70枚近くを獲得し、二位である遼寧省の41枚を大きく引き離れた。とはいえ最も競技で活躍するのはやはりオリンピック代表候補の選手たちである。彼らにとっ

てここでの活躍が2004年のアテネ大会への切符獲得に繋がるのである。しかしその一方、今回の大会では薬物使用の発覚による選手の処分という不祥事も起きており、国際的な競技大会で何かと薬物使用疑惑が取り沙汰される中国としては、国内での意識改革が急務である。ちなみに次回の全国運動会は2005年に江蘇省で開催される予定である。2008年の北京五輪開催へのプレイベントとして、今回以上の盛り上がりを見せるに違いない。

(上野稔弘)

日本館 便り

nihonkan・dayori

ノボシビルスク国立大学における 考古学・民族学教育

師走も終わりに近づく昨今、ロシアのノボシビルスク市では新年をむかえる準備が着々と進んでいる。街の広告看板には「新年おめでとう」版があふれ、テレビやラジオを聴けば、あと〇〇日で新年！もうすぐクリスマス！といった声が響いてくる。日本の街では、12月25日を境にしてクリスマスの装飾がとかれ、急にお正月を迎える準備がはじまる。ロシアというよりキリスト教圏では、日本のようにクリスマスとお正月が明確に区切られて祝されることはない。こちらの人々にとっても新年といえば、クリスマス・恋人(?)・樅の木・サンタクロース（ロシアでは「Ded Moroz」文字通りに訳すと「寒さの爺さん」）などという言葉によって象徴されるものなのである。クリスマスと正月は一続きの時間であり、例えば街の広場に建てられたクリスマスツリーは1月1日をすぎてもそのままである。12月にはいと、お店の中や研究所や大学のなかにもクリスマスツリーが飾られるようになり、中旬を過ぎると市場でも樅の木が売られるようになった。



ノボシビルスク国立大学

さて今回の日本館だよりでは、ノボシビルスク国立大学（以下、ノボ大）の人文学部（Gumanitarnyj Fakul'tet）考古学民族学学科（Kafedra arkheologii i etnografii）を紹介したいと思う。私が知り合った何人かの大学人がいうところでは、この大学はロシアのなかでビッグ3に入るらしい。残りの二つはモスクワ国立大学とサンクト・ペテルブルク国立大学である。このなかでノボ大は1959年9月に正式に発足した新しい大学である。注意したいのはノボ大がノボシビルスク市内にあるわけではなく、近郊のアカデムゴロドク（学園都市）という街に位置していることだ。1958年ソ連科学アカデミーシベリア支部が創設されたが、そのときに研究所や大学が集中する学園都市が建設されたのである。

ノボ大は当初理工系学部を中心としてはじまったが、1962年人文学部が創設された。人文学部の初代学部長はA.P.オクラドニコフ歴史学博士であった。彼はすでに故人だが考古学者としては世界的に有名で、その著作は日本語にも多数翻訳

されている。人文学部は当初 ①歴史学・考古学 ②シベリア諸民族の言語と民俗学 ③比較歴史言語学とロシア語学の三本柱のもとに教育を行い始めた。その後さまざまな学科の変遷がおこなわれ、考古学民族学学科は1992年に世界史学科から独立して設立された。考古学民族学学科という組織は新しいものの、人文学部設立当初から教育研究の結果、これまで150人もの考古学者及び民族学者を輩出してきたという。彼らの多くはノボシビルスク大学及びシベリア・ロシア極東地域等の他の大学・研究機関に就職している。

考古学民族学学科が新たにつくられた目的は、北アジア・中央アジア・そして中国・韓国朝鮮・日本を含む東アジアの考古学およびシベリア民族学における専門家を養成することにある。初代学部長はロシア科学アカデミー正会員のV.I.モロージン歴史学博士で、現在は歴史学博士Yu.S.フジャーコフ教授がその任にある。専任スタッフは助手も含めて12人の考古学者・民族学者がとめており、そのほか同じ学園都市内にある考古学民族学研究所（Institute of Archaeology and Ethnography of Siberian Branch of RAS）などから非常勤講師が招かれている。

学生はこの学科で考古学・民族学・東洋学を学ぶことができる。開講されているのは、考古学原論、民族学原論、先史社会の歴史、古代文明史、遊牧民の歴史、アジア・アフリカ史、中国史学史及び史料学、ロシアにおける東洋学史、中国文学史、中国・韓国朝鮮・日本文化史、東洋思想史、中国語、日本語、韓国朝鮮語である。また先述した考古学民族学研究所との協力の下、考古学実習も行われている。近年開講された特殊講義を

紹介すると、この学科の特色が見えてくるのでやや長くなるが紹介しよう。「旧石器時代とヨーロッパ乾燥地帯」「考古学におけるゴート人の諸問題」「中央アジア考古学の諸問題」「南シベリア考古学」「極東考古学」「シベリア中世考古学」「極東の中世」「中央アジア遊牧民と軍事」「エニセイ川のキルギス人」「中世における南シベリア・中央アジア遊牧民の芸術」「ミッレルの研究におけるシベリア諸民族の考古学および民族学資料」「シベリアの歴史地理」「中国地理」「コロンブス以前のアメリカ史」「中国の民俗」「日本文化」「東洋における軍事工芸」「日本語における文法的同義語研究」等々。こうしてみると、南シベリアと中央アジアの考古学教育に特色があるようにおもわれる。さらに関心のある方は以下のURLを見られたい。<http://gf.nsu.ru/kaf/kaie.shtml>

(2001年12月22日記、高倉浩樹)



東北アジア研究センター 開設5周年記念行事について



祝辞を述べる阿部総長

本センターでは、開設以来まる5年目を迎えたことを記念し、10月1日に式典と記念行事を開催しました。記念式典は10月1日の午後4時30分より、ホテル仙台プラザ3階の松島の間を会場として行われました。学内からは総長、副総長、事務局長、各部局長をはじめとする多数の関係者が参加し、また学外からも日頃のセンター活動を支援している民間や他機関の関係者の参会を得ました。山田勝芳センター長の式辞に続き、阿部総長、西澤潤一岩手県立大学長（前東北大学総長）の祝辞があり、これまでの5年間のセンター活動についての総括・評価と、今後の研究活動のより一層の展開に対する抱負・期待が表明されました。特に、文理融合型の地域研究の確立を目指す本センターの取り組み、ならびにロシアやモンゴル等との学術交流の成果に対する高い評価が寄せられました。式典の後は、引き続き記念懇親会が行われ、立食を交えての和やかな雰囲気の中、センターの今後の学術活動や、東北アジア地域の諸情勢についての自由な意見交換がなされました。

また、これに先立って同日午後1時30分より行われた記念講演会では、オックスフォード大学教授のDavid Faure氏による「ネットワークと会社組織：20

世紀アジアビジネスにおける2つの文化」ならびに本センターの環境技術移転寄附研究部門教授・渡邊之氏による「出会いに魅了される旅：寄附研究部門の設置と活動の現況」の2つの講演が行われ、あいにくの悪天候にもかかわらず、一般市民を含む約100名の来聴者がありました。講演の内容は、前者が中国社会におけるビジネス経営のあり方の歴史の変遷という広大なスケールの歴史・文化研究、後者は最先端の環境技術の紹介とその実用化に関する大学の学術研究のあり方への提言であり、同センターの扱う広範な研究対象領域ならびにその多様な研究手法を如実に示すものとなりました。

開設5周年は、本センターにとって大きな節目です。いわゆる「法人化」を前途に控えた日本中の大学の改革の中で、既存の学問領域を横断する「文理協力」、そしてもう一步進んで「文理融合」というものは、未来の学術研究のあり方を模索するひとつの大きな柱となっています。本センターは時代に先駆けてこうした課題を実践しつつありますが、5周年記念の行事は、このような本センターの取り組みの重要性を内外に広くアピールする場となりました。

（瀬川昌久）



講演する David Faure 教授

東北アジア研究センター日本館と ロシア科学アカデミー・シベリア支部の 鉱物学・岩石学・地質学研究所との合同研究会

東北アジア研究センター助教授
北風 嵐

2001年11月22日、東北アジア研究センターの日本館とロシア科学アカデミー・シベリア支部の鉱物学・岩石学・地質学研究所との合同研究会が上記研究所のメインビルディングの講演会場で行なわれた。講演題目は「北東アジア地域の超塩基性岩とこれに関係する鉱石鉱物」とかなり専門的であったが、主として約40人の上記研究所の研究者が集まり成功裏に終了した。

研究会は同研究所のドブレツォフ所長の司会で始まり、主として筆者が今まで遂行してきた主な硫化鉱物系の合成実験結果、マントル起源の超塩基性岩中に見られるCu-Fe-Ni-S系鉱物の産状、化学組成及びその生成環境などについて約40分英語での講演を行い、その後上記研究所の3人の研究員がこれらに関する硫化鉱物の合成実験結果、マントルゼノリス中の超塩基性岩特徴などに関するパネル講演を各人約10分間行なった。その後総合討論に入ったが、上記研究所にはこ



鉱物学・岩石学・地質学研究所のメイン・ビルディング

のような研究をしている研究者が多数おり、質問の殆どは筆者に集中し、その討論は約50分にも及んだ。時にはロシア語での質問もあり、ユリー・リタソフ博士に通訳して頂き、無事成功裏に終了した。これも上記研究所のドブレツォフ所長とユリー・リタソフ博士及び無機化学研究所の協力の賜物と感謝している。

この研究会は研究交流として成功であったと確信しており、今後もこのような研究交流を積極的に行う必要を感じた。上記研究所ではシベリア地域における地球科学の広範囲の問題が地質学、岩石学、鉱物学および地球物理学の研究部門によって研究されている。関連する4つの研究部門が、シベリア地域の一般的な地質学、金属鉱床学、非金属鉱床学、石油およびガス地質学に関する研究、地球物理学、鉱物学および記載岩石学の研究に従事している。



講演中の筆者

● 最近の共同研究会から ●

◆ 2001年11月10日（土）の14:00～16:00に共同研究「東北アジアにおける民族の跨境生態史」の第2回研究集會が開かれ、姜龍範・中国延辺大学教授の講演「中国朝鮮族と南北統一に果たすその役割」が行われた。



姜龍範氏の講演

◆ センター公開講演会の前日11月30日（金）の15:00～18:00、講演会講師である和田春樹客員教授のほか同じく客員教授である江夏由樹氏（一橋大学経済学研究科教授）、また法学研究科助教授の南基正氏を迎えて公開研究会「東北アジア地域史の諸問題」が行われた。上記3氏の他センターから平川新教授、上野稔弘助教授、岡洋樹助教授、寺山恭輔助教授、伊賀上菜穂講師が参加して各自専門領域の諸問題に関して報告をし、その後全員が参加しての討議を行った。



報告する江夏客員教授



会場風景

◆ 12月4日(火)の14:40～16:10、三重県をはじめ全国各地の地方自治体の行政経営改革に携わっている石原俊彦・関西学院大学産業研究所教授を迎えて特別講義「地方自治体改革と公会計の役割」が行われた。

◆ 12月12日(水)の13:30より共同研究「西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究」の研究会があり、以下の報告が行われた。

1. N. Yurlova, and E. Zuykova (Inst. Animal Systematic & Ecol., SB RAS)

“The Chany Lake”

2. 鹿野秀一・土居秀幸(東北アジア研究センター)

「平成13年度チャニー湖の現地調査結果について」



(左から) Yurlova, Moshkin, Zuykova の各氏

◆ 12月14日(金)の15:00～18:00に公開講演会があり、ロシア科学アカデミー世界史研究所・北米センター長でアカデミー会員であるN. N. ボルホヴィティノフ氏の講演「ロシア領アメリカ(アラスカ)の歴史と露米会社の活動(1799-1867)―日露交流史の視点から―」が行われた。

(柳田賢二)

センター動向

■ 寄付研究部門

昨年1月1日より次の寄付研究部門が設置されました。

【環境技術移転(NKK)寄付研究部門】

- 渡邊 之(ワタナベ, イタル) 教授: 環境技術 (昨年1月着任)
- 魁叶 (スエー) 助手: 環境政策 (昨年4月着任)

■ 現在の客員研究者

本年1月～3月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹(ワダ, ハルキ) 教授: 東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹(エナツ, ヨシキ) 教授: 一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三(ヨコヤマ, リュウゾウ) 教授: 岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- 恩和巴図(エンフバト) 教授: 中国、内蒙古大学蒙古語文研究所教授、ダグル語の口語および文献資料の言語学的研究
- BADARCH Dendeiin (パダルチ, デンデヴィン) 教授、モンゴ

ル、モンゴル科学技術大学・学長、言語を主体とする情報工学の教育とその実践

● OKRUGIN Victor M. (オクルギン, ビクトル, M.) 教授: ロシア、ロシア科学アカデミー・極東支部火山学研究所主任研究員、東北アジア地域の多金属鉱床の生成環境に関する研究

● 鄭永振(テイ, エイジン) 教授: 中国、延辺大学教授・渤海史研究所長、ツングース系諸族の興亡とその文明～渤海を中心に～

<客員研究員>

● 呼日勒巴特爾(フレルバートル) 研究員: 中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究

● BORONOEVA, Darima Tsybikovna (ボロノエヴァ, ダリマ, ツィビコヴァ) 研究員、ロシア、ロシア国立プリアート大学文化学部主任教官、日本におけるモンゴル系民族コミュニティに関する研究

● LITASOV, Konstantin D. (リタソフ, コンスタンチン, D.) 研究員: ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部地質学地球物理学鉱物学総合研究所研究員、マントル組成十水系の高温高圧下での実験

● POPOVA, Liudmila (ポポヴァ, リュドミラ) 研究員: ロシア、サンクト・ペテルブルク大学経済学部講師、北東アジア地域の経済協力について

(塩谷昌史)

●東北アジア学術交流懇話会●

会員の広場

お互いの交流拡大を目的として、会員みなさまの近況・ご意見などを発信していただく“会員の広場”スペース（不定期）を設ける事にしました。
積極的な寄稿をお待ちしております。

2001年10月1日開催の、東北アジア研究センター開設5周年記念行事（詳細5ページ）には、学内外の関係者にまじり、20余名の本懇話会学外会員のご出席をいただきました。夕方行われた記念懇親会会場には、各国から来られている客員教授などを中心に人垣の輪

が幾つもでき、中国語・ロシア語・韓国語・モンゴル語などが飛び交う国際交流親善の場となりました。

今回の“会員の広場”は手始めに、記念懇親会に参加された本会の方々の写真を紹介します。

■東北アジア研究センター・開設5周年記念行事（2001.10.1）

記念懇親会 スナップ写真



写真2
左より佐藤利三郎氏
（東北大名誉教授）
と、阿部博之 本会
顧問（東北総長）



写真1 会場風景：西澤会長のご挨拶に聴き入る参会者



写真4 吉田進本会理事（ERINA 所長）、岬 暁夫氏（早大客員研究員）とご歓談の大道寺副会長



写真3 左より、渡辺・大道寺 両副会長と西澤会長
ご多忙ゆえ、3人お揃いの写真は大変貴重



写真5 木村信夫氏（JICA 東北支部 支部長）、香川敬三氏（同 部長代理）とご歓談の西澤会長



写真6 ロシアよりの客員研究員二人と塩谷助手（日本館元駐在員）を囲んで、ロシア語での歓談を楽しまれた左端 佐藤尚氏（ERINA）と佐々木幹夫氏（河北新報OB）



EDITOR'S NOTE

編集
後記

多くの会員のご出席をいただいたにもかかわらず、紙面にかぎりがあり上記写真には一部の方だけの掲載となりましたことご理解お願いいたします。

今回より裏表紙面に“会員の広場”コーナーを設け、一般会員の方々に登場していただき、各種情報発信をお願いする事にしました。ご協力お願いいたします。
（出張中の成澤編集長代 岩山健三）

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第12号 2002年1月31日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター編集委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター気付

PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail :iwayama@cneas.tohoku.ac.jp